

ストリートチルドレンのケアの実践とネットワーク

—ネパール、カトマンズのストリートチルドレンの日常実践におけるケア—

○ 京都大学大学院 氏名 高田 洋平 (8370)

キーワード3つ：子ども、ケア、実践

1. 研究目的

資本主義の浸透とともに、現代社会のセーフティネットなき流動性は加速し、不安定労働者層やアンダークラスとされる人びとが構造的に生み出されている。子どもという存在もその例外ではない。ストリートチルドレンは、1989年国連で「子どもの権利条約」が採択されて以降、メディアやNGOによって取り上げられてきた。その過程で、ストリートで生きる子どもは「貧困の被害者」として表象され、本質的な社会集団として社会的に構築されるようになる。彼らを被害者とするNGOは、しばしばストリート生活で子どもが直面するリスクを強調してストリート生活を抜け出すための支援や介入を正当化してきた。

しかしそのようなケアの実践は、ストリートで生きる子どもがもつ「ストリートで生活したい」という選好や要求ニーズと矛盾する。子ども自身が、ケアの与え手が見出した潜在ニーズを受け入れることを拒否するという事態、言い換えれば子どもがストリートチルドレン問題の当事者たることを拒否している事態は、現在、支援の現場で様々な矛盾や困難として現れている。これは、ケアの与え手や制度的な問題というよりも、受け手の経験に対する理解不足による問題である。そのように考えた場合、子どもはストリーートのなかでどのようにケアというものを経験しているのかについて、彼らの日常実践に基づいて描かれる必要がある。

そこで本研究は、そのようなストリートで生きる子どもたちをめぐるケアの実践について、文化人類学的な視点や方法論を用いて、ケアをめぐるに関する彼らの実践や経験に接近してみたい。さらにそれらを明らかにすることを通して、当事者能力がないとされる子どものケアの実践について考察してみたい。

2. 研究の視点および方法

文化人類学的な方法論を用いてストリートで生きる子どもたちのケアの実践について描く。その際、ストリートチルドレンを従来のように「救済対象者」や「貧困の被害者」として弱者救済的な視点からカテゴライズするのではなく、状況を変革する力能、エージェンシーをもった子どもとして捉える。そして、彼らが経験するケアの実践をネパールの都市社会やストリートという環境など社会的文脈のなかに位置づけて記述する。

3. 倫理的配慮

個人情報保護の観点から調査で明らかになった内容について、その取り扱いに十分留意する。特にインフォーマントの名前は、本人の承諾がない場合は、基本的にすべて仮名を用いて表記する。調査地の詳細については公開に関して同意を得ているために必要な限り公開するが、インフォーマントの不利益につながらないよう配慮を心がける。

4. 研究結果

ストリートチルドレンは、ネパール都市社会のコンテクストのなかで深刻な社会問題として構築されていったが、一方で、ストリートで生きる子どもたちは、「ストリートは子どもの成長にとって有害である」という NGO などのケアの与え手が見出す潜在ニーズを完全に受け入れることなく、ストリートでの生活の基盤を形成している。インタビューや参与観察によって、NGO 職員がストリートで生きたいという選好をもった子どもを「悪い子ども」として境界づけていたのに対して、ストリートで生きる子どもたちは、ストリート環境のなかで、他のストリートで生活する人びと(野宿者、ストリートの物売り、有価廃棄物取引業者等、インフォーマルセクターで働く人びと)とのあいだでケアの実践を可能にするより広いネットワークを形成、維持しながら、ストリートで遭遇するリスク、子ども特有の傷つきやすさに対処しているという実態が明らかになった。そうした経験のなかでは、多様な NGO が提供する多様なケアの実践もそれぞれストリート環境を生き抜くためのツールの1つでしかない。それは NGO のケアの受け手として自己を定位するのではなく、NGO を自らの生活の基盤に組み込みながら展開されるケアの実践の姿でもあった。

そうしたケアの実践は、構造的に生み出されるアンダークラスを生きる人びとがぎりぎりの生活のなかで生み出す実践的な知によって可能になっており、今後そのような知や日常実践を尊重したケアのあり方を考察する必要性を示しているように思われる。

5. 考察

ストリートチルドレンは、NGO、開発団体、メディアや政府組織によって「貧困の被害者」として表象され、社会的に構築されてきた。それによってストリートチルドレンは、境界が固定化され、本質的な社会集団として理解されてきた。そうした理解は、子どもが置かれているある現実を反映しており、その点においては正当性がある理解の仕方である。しかしこの理解は、当事者とされる子どもたちのリスクに対処する能力を低く評価する傾向にある点で問題を残すものであった。この問題は、ネパールで行われているストリートチルドレン支援をめぐる現場で、ケアの与え手、受け手双方の困難性として現れている。本研究では、人類学的方法論によって子どもたちの経験に近づき、ストリートで展開されているケアの実践はいかに展開されているのかを明らかにすることを通して、当事者能力を欠くとされる子どものケアに関して考察を深めてみたい。